

Coming Out Story 上映会

梅沢圭 & 土肥いつき スペシャルトーク

【日時】

公式HP <http://www.coming-out-story.com>

3月20日(火) 祝日 13:30開場
14:00開演

【内容】

上映会

14:00~15:00

梅沢圭&土肥いつきスペシャルトーク

15:00~16:00

会場との質疑応答

16:00~16:30

【参加費】

ひとり1000円

中・高校生は500円

小学生以下は無料

【会場】

「ひと・まち交流館 京都」の大会議室



京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の

* 京阪五条駅から約500m 地下鉄五条駅から約750m

京都駅から約1Km



～作品紹介は裏面をご覧ください～

【主催】 「Coming Out Story」 上映実行委員会
お問い合わせは、中江までEメールでお願いします。
junko-nakae@jeans.ocn.ne.jp

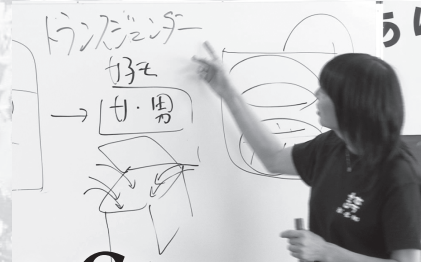
【協賛】 財団法人日本クリスチャン・アカデミー
関西セミナーハウス活動センター

「性」、「過去」、「欲望」、「未来」……………。

ひとりの「女性」を通して見えてきたのは、「生きる」ということの本質だった。

“Coming out story”は、2010年度の日本映画学校の卒業制作として作られ、その年の最優秀監督に贈られる「今村昌平賞」を受賞した。しかし、梅沢監督は映画の持つ「問い」に未だ、確固たる回答を出していないと感じ、卒業後、ひとり再編集を開始する。完成した本作品は、「第20回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭」で上映されるなど、多くの反響を呼んだ。

これは、「男」と「女」のあいだを揺れながら、心の底から湧き出る「わたし」という声を発せる場所を探し続ける人々の魂の記録である。



Coming Out Story

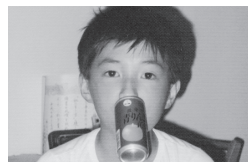
カミングアウトストーリー

監督/構成：梅沢 圭

出演：土肥いつき 米沢泉美 阿久澤麻理子 他
撮影：猪本太久磨/梅沢 圭 録音：豊島 圭 音楽：KIKORI
製作：日本映画学校
プロデューサー：川久保直貴
撮影協力：京都府立城陽高校 NPO法人JUMP
トランスジェンダー生徒交流会のみなさん
60分/カラー/HD/2011年製作/ドキュメンタリー

www.coming-out-story.com

Story 「自分にとって根源的な欲望は女性の身体を獲得することだった」とおだやかに語る土肥いつきは、長年の夢だった性別適合手術へと向かう。京都の公立高校で教師を続けながらこの十数年来、すこしずつ女性化してきた彼女(彼?)の身体的な終着地点。軽やかな関西弁で、いつも笑顔を絶やさない、いつきのまわりにはいつも人々の輪が絶えない。しなやかに、ときに忍耐づよく、他者にとっても自分にとっても居心地のよい場所を探し続けるいつきにだれもが今まで一度も口にしたことがないような想いをつい口にしてしまう。ある日、取材を続けていたスタッフのひとりが突然、現場を離れてしまう。いつきと出会い、時間を共有するなかで彼自身の封印していた秘密と対面することになる……



いまでは「歩くカミングアウト」と冗談まじりに自称するいつきさん。そんないつきさんも十数年前に「トランスジェンダー」(性別を越境して生きる人々)という言葉を目にするまでは、女性になりたいという自らの夢に「変態」というラベルを貼って、心の奥底にひた隠すおじさんでした。そこから「彼女の笑顔の裏に隠された覚悟の旅」がはじまります。

「ありのまま」、「自分らしさ」という言葉がどこか空疎に響く現在。繰り返される出会いのなかで常に新しい「私」と「あなた」の関係を生きようとするいつきさんと、この映画の登場人物たちの声は性別やあらゆる属性を超えたところで、あなたの魂の根っこに触れるだろうことを信じています。

監督 梅沢 圭

生きてるとき、色んなことがあってさ。男なのに男の子好きになったりさ、女の子になりたいって思ったりさ。自分でも何でそんなことになってんのか分かんなくて、誰にも相談出来なくてさ。毎日、気持ちわりつめて、自分を何度も否定しては肯定したりの繰り返しでさ。気づくと自分の中に色んな理由が一杯になって面倒くさくたまらなくてさ。そんな自分のありようをうまく伝えることができなくて途方に暮れてさ。ありのままに生きて何だろうね? 自分らしく生きて何だろうね? あっちこっちぶつけて、すりむいて、ヒリヒリして、それでも生きていくんだろうな。だって、それしかできないもん。

橋口亮輔 映画監督

タイトルは「Coming Out Story」だが、テレビ番組のような、涙の告白シーンなんてものはない。淡々と日常が映し出されていく。だが、その日常の撮影の中で、監督自身、およびスタッフのセクシュアリティも揺さぶられ、映画自身が彼らのカムアウトにもなっていく。さらに、それは見ているものにとっても、「自分とはなんなのか」という根源的問いかけとなる。その問いかけを自分自身になすことこそが、われわれすべてにとっても、カミングアウトだと気づかされるであろう。

針間克己 精神科医

この作品が描いているのは限られた人々の物語でもなければトランスジェンダーの実態でもない。ここに描かれているのは「勇気」だ。すべての日本人は「勇気」を持って行動しなければ現代社会では生きていけないことを梅沢監督とスタッフがこの映画の登場人物は「勇気をもって」教えてくれる。

緒方明 映画監督